

頂にたどり着けなかった男と眼鏡少女

猫カイト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

頂にたどり着けなかった幽霊と麻雀初心者の少女の出会いから始まる頂を目指すストーリー。

目次

頂にたどり着けなかった幽霊のプロローグ	1
ネット麻雀と積み重ね	4

頂にたどり着けなかった幽霊のプロローグ

所謂麻雀バカだ。

人生の大半を麻雀をして生きてきた。

金は裏の麻雀で稼いできた。

所謂代打ちってやつだ。

勝てば天国負ければ地獄

それが俺のいた世界。

そんな麻雀に嫌気が差して止めようと思ったことはあった。

だが、少ししたらまたこの世界に戻って来ちまってる。

そんな狂った生き方に愛想が尽きて周りの奴は皆裏の住人以外居なくなつた。

裏しか居場所が無くなつた俺は裏では結構な地位まで上り詰めた。

もう少して裏の帝王と呼ばれる所だつた。

そんな時ある男が現れた。

そいつは白髪で、まるで生氣を感じない死神のような男だつた。

俺はそいつから恐怖を感じた。

俺の対戦してきた者の中で一番の異質。

理など考えていない麻雀。

それでいて素人ではない打ち回し。

そして凍てつくほどの冷たい眼光

「ツモ 嶺上開花タンヤオのみ。逆転だな」

俺はそんな死神に負けた。

「嶺上開花か……それで負けるとは因果な物やな」

嶺上開花は俺の裏麻雀で初めての勝利を掴ませてくれた役

それで負けちまつた。

「あんととの麻雀面白かつたぜ。」

そんな台詞を言われたのはいつぶりだろうか。

裏に入ってから言われることがなくなつたセリフ。

「俺も楽しかった!!またやろうや!」

「ああ、先に逝つててくれ。その内追い付くさ」

「何か最後に言い残す事はあるか？俺とあんたの仲だ。誰にでも伝えてやるよ。」

そんな台詞を俺の雇い主は言い放つ。

「そうさなあ……特にねえわ」

最後にあんな麻雀出来たんや

悔いは無い。

「あばよ。剣」

そこで俺の一生は終わった。

「それで俺は幽霊になったって訳。」

「はあ!?まるで分からんわ!!その終わりかたでなんで幽霊になんねん！理解できんわー！」

「俺にも分からん！でも未来の麻雀に触れられるからまあいいわ！」

「…私麻雀なんて出来へんで。」

は？

「マジ!?」

「マジや。麻雀見たことはあるけどやったこと無いねん。」

「そうか…なら俺が一から教えたる!!」

「嫌やわ！おっさんから教えられたら裏麻雀打ちになっちゃいそうやん！」

「グツ…反論出来ねえ。」

そもそも俺に人に教えた事なんて無かった。

俺の師匠も見て盗めってタイプやったし。

……麻雀大ブームの世の中やのに麻雀知らん奴についてちまうってどんなに不運やねん。

やっぱ死神に運氣吸われたか？

それとも生前に運がありすぎてその皺寄せか？

でもオモロイやんけ！麻雀初心者と元代打ち！

「まあ、簡単な事だけ教えたるわ。知つといた方が友達とかと遊べるやろ?」

「それもそうやな……じゃあよろしくなおっさん！」

「ああ！よろしくな！」

麻雀で死んだ俺が青髪の眼鏡少女に憑いたことから運命は動き始めたんや。

ネット麻雀と積み重ね

私はおっさんに麻雀の基本的な事を教わってネット麻雀を始めた。ほんとは雀荘に行かせたかったらしいけど小学生のお小遣いで行けるわけもないのでおっさんを説得してネット麻雀にしてもらった。おっさんは負けたら窓から金払わず逃げればいいとか言いよつたけどこの年で犯罪者になりたくないわ！

「またロンかいな！〔北〕待ちなんて読めるか！」

「そんで今絶賛焼き鳥中って訳や。」

「どや、負けてるか？」

おっさんはそう言い放ち部屋に戻ってきた。

「どうやら私の近くに必ずいなきやあかんとかそういう制限は無いらしい。」

「あかんわあ、相手の待ち牌とか全然読めんわあ。両面待ちとかカンチャン待ちとか単騎待ちとか色々有りすぎて分からんなるわあ。特に七対子。あんなん読めるかいな！」

私はおっさんにそんな怒りをぶつける。

「別に負けてもいいんや。」

おっさんはどっから取ってきたのか、

焼き鳥を食いながらそんなことを言い放った。

「麻雀って順位を争うゲームやろ？それで負けてもいいってどういうことなん？」

「当然の疑問を私は投げ掛ける。」

「これは負けても何も無くならん麻雀や。金や命を賭けてるわけやないただの麻雀や。」

そりやそうや、ネット麻で命を賭けるなんて聞いたことない。

「麻雀ってのは経験の積み重ねが一番大事やと俺は思っとる。捨て牌だけでは相手の待ちは読めん。さっきみたいな〔北〕待ちとかもあるからな。」

「その経験の積み重ねの為にネット麻を打ってことかいな」

「そや、それがレッスン1や。これは手牌作りにも役立つことや。最初はたくさん負けていい。最後に勝てばいいんや。」

おっさんはそういつて部屋から出ていく。

「おっさんつてああ見えて考えとつてんなあ。ちよつとは見直したわ。」

麻雀は経験の積み重ねか。

「よし!!とりあえず目標は1ヶ月で50戦や!」

そして私はネット麻を始める。

ツモ 天和

そんな機械音声が鳴り響く。

「天和のどこから学べつて言うんや!!」

そして私はマウスを投げた。

「いやあ、流石に天和は俺も予想しとらんかったわあ」

おっさんは笑いこけとる。

このおっさん悪魔か!

見直したかと思つたら初つぱなこれかい!

「まあ、天和で飛ばされんだけまだラッキーやと思わな。どつかのライオンは天和を飛ばす場面で出してくるらしいからなあ」

そんな奴居てたまるか!!

「まあ、焼き鳥でも食つて気分転換や!」

おっさんが焼き鳥を手渡してくる。

「ありがとな、おっさん」

私は焼き鳥を口にする。

鳥肉にタレがしつかり浸透しててすごく旨い!

「そういやこのおっさん…娯私以外に見えんからお金つて払えへんのじゃ!？」

「な、なあおっさんこの焼き鳥つてどつかから」

「まあ細かい事は気にすんな!細かい事気にする奴は長生きせえへんで!」

おっさんは目を反らして汗をかきながらそう言い放つ。

「もうこのおっさん嫌や!!」

「煩いで！絹!!今何時やと思ってんねん！」
おっさんの笑い声が木霊する。